



No.62 2020.7.6

明石市コミュニティ・スクールだより
人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

コロナが開けた扉

この頃ウィズコロナ、アフターコロナといった言葉をよく耳にします。また社会の仕組が変わっているのも伝わってきます。さて学校はどうでしょうか。NHK視点・論点(6月22日)で苫野一徳氏は学校の現在の状況を次のように語っています。

新型コロナウイルスの影響が続く学校教育界は、今、「そもそも学校は何のためにあるのか?」、その存在意義を抜本的に問い直すことを余儀なくされています。

近代の学校制度が始まってから、およそ 150 年。そのシステムは、ほとんど変わることなく、これまで次のようなものとして続いてきました。すなわち、「みんなで同じことを、同じペースで、同じようなやり方で、同質性の高い学年学級制の中で、出来合いの問いと答えを勉強する」というシステムです。しかしこのシステムが、コロナ禍のただ中であっては、ほとんど機能しなくなりました。つまり、みんなで同じことを、同じペースで、一律に進めていくことができない。

.....

今こそ、このシステムを本気で転換していく時であると訴えたいと思っています。

参照原文:NHK論説室 <https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/431662.html>



コロナ禍で我々一人一人が社会や学校のシステムの弱点を体感したといった感じではないでしょうか。“ウィズコロナ、アフターコロナ”の学校を考えてみるにあたり、この絵に私は「コロナが開けた扉」という題名をつけてみました。

コロナが開けた扉の向こうには何があったのでしょうか。扉の向こうは、もう Society5.0 の社会でした。Society5.0 とは「サイバー空間とフィジカル(現実)空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間社会」と定義されています。

コロナ禍前、私は 10~20 年くらいかけながらゆっくりと Society5.0 へ社会も学校も移行していく、そうしたつくられた世界が向こうからやってきてくれると勝手に想像していました。しかし、今回のコロナ禍を経験する中で、コロナ禍によりもたらされた混乱を乗り越え、経済発展と社会的課題を解決するためにサイバー空間とフィジカル(現実)空間を高度に融合させた仕組を創り出していく当事者に我々自身が立たされたと考えるようになりました。また、SDGsやコミュニティ・スクールといった取組が求められるようになっていたのは、正にこうした課題を乗り越えることができる、当事者意識を持った市民を育む必要が迫っていたからではと思えるようになってきました。

さて扉の向こうに踏み出すか、慌てて扉を閉め、オールドノーマルの社会に居続けようとするか、そうした岐路に学校は立っているのではと思います。

でも、現実はまだ扉は開いてしまっているのです。「コミコミスクスク No.59」でご紹介した、“東進オンライン学校”の記事に興味を持たれた方が実際に申し込まれたそうです。自分の進度にあった学習をすすめながらその



学習の様子が保護者にもメールで届き、その結果をもとに親と子が対話することが増え、そのことがまた子どもの励みになっているといった感想をお持ちだと聞きました。

今回のコロナ禍の中で、こうしたシステムの学びを経験した子どもや家庭は少なくないと思います。こうした親子はすでに開いた扉の向こうの学びを知っているのです。来年度の今頃、子どもたちはタブレットを手にしています。先日ある方から、タブレットを使った授業のための教材を教育委員会でつくってくれたら助かるといわれました。タブレットを使うために、タブレットを使った授業方法といった研究が盛んになり、タブレットを使ったオールドノーマルの時代の授業から抜け出せない状況になるのではとドキッとしました。授業は一旦おいて、これからの社会に必要な仕組みを創り出していく当事者としての意識を高めていく必要があるのではと思います。

姫路市では Gsuite が全小中高に導入されたことをきっかけに小中高の教師が主体となって“GEG Himeji”というグループを立ち上げ、オンラインの活用にもつてスタートされたようです。こうしたこれからの教育を創る当事者としての動きが各地でどんどん生まれたいと思っています。もちろんこの明石にも。



これからの時代、教職員の中での協働だけでなく、保護者や地域といった社会との協働が必要になってきます。学校だけで変わるのではなく、社会も変わっていきます。変わろうとする学校や社会を理解し、共通のゴールを描くことが必要です。そのためには教師も、保護者の方も、地域の方も、そして子どもたちも社会を創っていく当事者としての市民として成長していくことが必要で、我々を成長させる仕組の一つがコミュニティ・スクールだと考えます。



これまで「そもそも学校は何のためにあるのか?」といった存在意義について、また学校のシステムについて考えることは正直なかったように思います。このコロナ禍を経験した今、これからの時代を生き抜いていく子どもたちに必要な力を育み、そして我々大人も成長するために子どもを真ん中に置いて学校・家庭・地域・そして子どもたちも巻き込んだ対話を始めることによって、当事者意識を高め、同じゴールに向かった協働の輪が広がっていくのではと考えます。こんな時だからこそ、「そもそも学校は何のためにあるのか?」といったテーマを設定したミニ対話からスタートしてもいいのではと思っています。NHK 視点・論点で苦野一徳氏は次のように締めくくっておられます。

「学びの構造転換」は、実はその理論も実践も、すでに100年以上の蓄積のあるものです。とすれば、あとは公教育システムに実装していただくだけです。そして実際、今、この「公教育の構造転換」とでも言うべき現象が、すでに全国のいたるところで起こり始めています。150年間、あまり大きくは変わってこなかった学校システムが、今、大きく変わろうとしています。変えていく必要があると私は考えています。

最後に、これからの学校や学びは、子どもたちの声をちゃんと聞きながら、子どもたちとともに作り合っていきたいということをお話したいと思います。子どもたちは、これからの市民社会の担い手、作り手です。であるならば、自分たちのコミュニティは自分たちで作るという経験を、私たちはたっぷり保障する必要があります。子どもたちが、何かを一方向的に与えられ続ける受け身の存在としてではなく、来るべき市民社会の一員として、学校づくりに関わる。アフターコロナの学校は、そのような学校でありたいと思っています。

(文責:北本)